

健苗育成意欲の向上について

高山営林署 小 田 圭 雄
織 橋 春 次

昔の人は、長い間の経験から無意識に苗木の、生理生態を、よく認識していて「苗木と対話することができた」と聞いているが、最近では、生理生態ということは、よく口にしますが、実際に苗木との対話が出来たまでの域に達していないのが、実情ではないだろうか。

このことは、私達の仕事は、木材生産のような華やかなものでなく、立派な造林地を造る手助として、健苗を育成するという地味な仕事の中で、とかく日常の作業にも積極性が薄れ、職場のムードも沈滞しがちである。そして苗畑作業の中に悩み、欲望が潜在しているのではないだろうか。

このため私なりに、日常の作業の中で実態を把握し、反省し、作業員の欲望や悩みに対し、どのように対応したらよいかと考え、年度当初において、やり甲斐のある仕事をし、健苗を育成するには、どうすればよいかと、みんなで話し合いを持った。

この中での意見は、

- ①よい苗木とは、どういう苗木をいうのだろうか。②育苗技術をもっと身につけたい。③苗木の気持が解るようになりたい。 など技術向上を図りたいという意見と、
①毎日変化のない仕事の繰り返しである。②地味な仕事の中で士気が上らない。 など活気があり、やり甲斐のある職場作りを求めての意見が多く出された。

これらの意見から、みんなで考え、みんなが自発的に意欲の向上を図り、納得出来る苗木作りを目指すためには、どんな方法がよいだろうかと考え、私なりに、今年度の取り組みについて、2本の柱を立てて進める事としました。

一本の柱は、地域社会の国有林離れがよく言われている事と、苗畑の所在する丹生川村には、苗木生産者が多い事から、技術交流を通じて、地域社会にとけ込み、合せて作業員に苗畑事業を肌で感じ取ってほしいというねらいから、「地域苗木生産者との交流を図る」こととした。

二つ目の柱には、作業員に自発的な意欲を持たせるという事で、従来の技術改善や、各種の調査では、作業員は補助的な立場にしか、なかったのではないかと反省から、作業員をグループ分けし、主体性を持たせる調査研究を企画し、私は助言、指導に止めるという方針を定め、女子作業員には、「さし木発芽率の向上について」、男子作業員には、「トラクターの排土板の改良について」、全員で「苗木形態調査と土壌調査について」、おのおの分担を決め、意欲を持たせる様にし取り組んだ事を項目毎に紹介する。

1 地域苗木生産者との交流について

村内には、45戸の苗木生産者が育苗組合を作り、育苗技術の向上を目指し、毎年研修会が実施されている。本年度の研修会には、事業所から始めて参加する機会を得10名が参加した。

研修内容は、当事業所を最初に。各生産者の苗畑を廻って問題点、疑問点を出し合い検討し、理解を深めるもので、参加した作業員も意欲的に、それぞれ持っている技術の交流を行った。

育苗組合では当事業所が、この研修会に参加した事を非常に喜ばれ、今後ともお互いの協力を誓い合ったが、この研修会を契機として秋の得苗調査に参加したほか、育苗相談も数多く受けており、地域とのつながりを深め、官民一体となって健苗育成の向上に努めている。

この研修会に参加した作業員の感想として、

- (1) 広い視野から苗畑を見る事が出来た。
- (2) 造林する側に立った苗木作りの必要性を感じた。
- (3) 外の空気に触れて沈滞意識から脱却した。
- (4) 生きた教材から身体で学ぶ事が出来た。

以上のような感想が述べられている。

2 さし木発根率の向上について

女子作業員に、自発的な意欲を持たせるということから、この課題に取り組んでもらい、従来、発根率60～70%であったのを、みんなの創意によって過去の実態を把握し検討を加え、丹生川スギの先駆地から指導を受け、これを参考として技術改善を図り、発根率80%まで向上する事が出来た。

過去の発根状況を見ると、土壌が過湿によって呼吸困難となり、発根出来ず穂先が腐って枯死するものが多く出る事が判明した。このことから土壌が過湿にならないよう通気、通水性を保った床作の方法と、発根因子である水分、湿度、照度管理等についても従来と変わった方法を試みた。

この中で発根率が向上した主な因子としては床作りの改善であり、この方法は土が乾いている時に耕耘、床上げ、地均し、ローラーで軽く鎮圧し、その上を2～3cmの深さに耕耘したところを水で練って、さし付けたものでこの結果、根腐れしたものは全くなく、根は下方側方によく張り理想的な発根を示し、上長成長も20cm以上伸びたものもあり山出し可能な苗木も得られた。又土壌断面も、地際2～3cm練った層は、しっかりと固定し、その下の土壌は固まりもなく膨軟になっている、このことは床作りの改善によって土壌の通気通水性が良くなったものである。

以上女子作業員を主体に発根率向上を図ったが、このことはなによりも自分達が、見たり、教わったりして意欲の向上を図り創意検討して取り組んだ事であり、自分達でやったという事を十分に感じ取っている。

3 トラクター排土板の改良について

当苗畑の土壌は理学的性質が極めて悪く、透水性、通気性不良のため過湿の害を受けやすい土壌のうえ、降雨後の歩行は、滑り易く靴には泥が粘着し「足が重い」という苦情も運命であると、諦めの心境である、その事は苗木にも影響し窪んだ排水の悪い箇所は、団子状の根とか根腐れという結果として現われている。

今後平床作業を目指し、土地改良を取り入れて行かなければならないが、畑地基盤が、しっかりしていなければ土地改良の手段方向が見定まらず、整地は土地改良の前提であるので苗畑整地が出来るものを、男子作業員が主体となって取り組んだ。

この結果、以前に転換を受けたが使用出来ず、男子作業員の創意で考案設計され、鉄工所へ何度も出向いて改良を重ねて完成した。

1回に押す土量は約0.3㎡であるが小細工が出来、畑地を崩すことがなく出来上りが丁寧に仕上がり、本年度は秋に16,000㎡の整地が出来た外、道路敷の修理及び苗畑区画など多くの作業に活用する事が出来た。

排土板が出来たことによって、一連の作業がスムーズにゆき、健苗育成の向上が図られるものと期待している。

4 苗木の形態調査と土壌調査について

長年育苗に係っていても、自分達の育てた苗木は、どういう苗木なのか、良い苗木とはどういう苗木をいうのだろうか。又苗畑土壌は、どのような土壌なのか、実際の姿が、解らなくては苗木との対話出来る域には達せず、苗木を育てるからには、自然と愛情が湧いてくる状態にならなければ十分な育て方が出来ないと思う。このことは基本原理をよく理解したうえで実行する事にあり実際に経験してこそ、評価もでき技術の進歩も得られるものである。

そこで山行苗木の形態調査と土壌検定を全員に経験してもらい、苗木の形態調査では、樹種毎にグループ分けし、調査のあと結果を発表して討議し合って理解を深めた。土壌検定は土壌の採取方法から、実際の検定、P日の矯正方法及び施肥設計まで手掛け、初めての経験であったが、各自が積極的に育苗技術向上を目指し真剣に取り組んでいた。

以上今年度に取り組んだ主な項目を紹介してきたが、夏期作業の終了時に反省会を持ち意見として出されたものを取りまとめ、要約すると、(別紙図解)

話し合いの中から和が高まり協調性のある職場となった。

自発的な意欲の向上と合理的作業の推進が図れた。

地域の人達と共に勉強し、健苗育成技術の向上を図り、緑を育てることに希望と自信を持って立派な苗木作りをしよう。

自分の選んだ職場に誇りを持って、よりよい職場としたい。

と、言うような反省がなされている。

これらについて今後、如何にして意欲を継続し発展させ、定着させるかは今後にかかっている。

私達がこの一年間色々と、取り組んだ事を紹介したが、健苗育成意欲の向上は、主要な課題として受け止め、今後とも積極的な取り組みを展開して行きたいと思っている。



S 52 年度

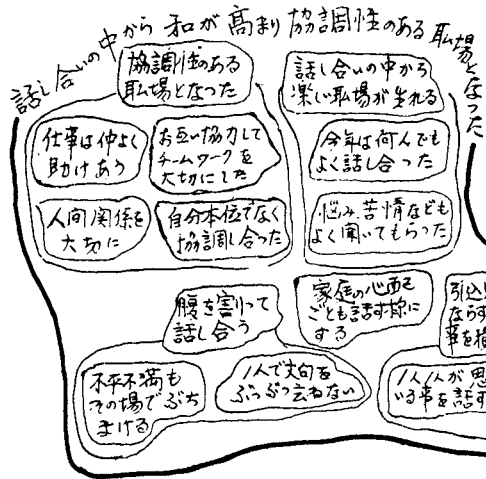
さし木発根状況



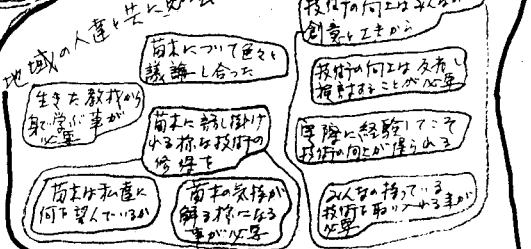
トラクター排土板の改良

により、

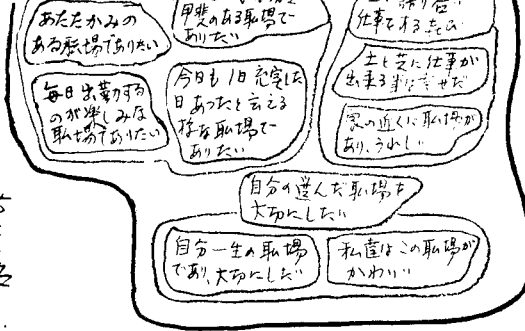
苗畑整地作業状況



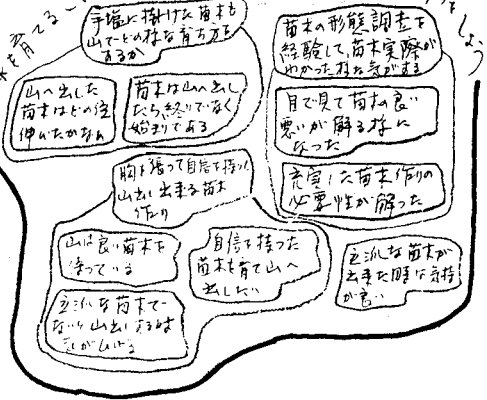
地域の人達と共に勉強し技術育成技術の向上を図ろう



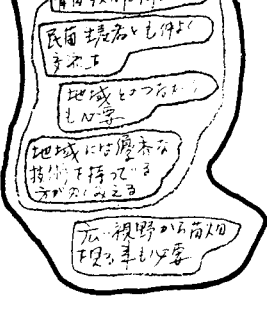
自分の選んだ取場に誇りを持ってよい取場としたい



希望と自信を持って之をこなす苗木作り



地域の人達と交流を育む技術の向上



5.22.12.5 丹生川植苗参加者18名反省会